

(研究ノート)

(日)・(英)慣用表現比較にみる 異文化理解教育の可能性

～思考様式の特徴に焦点を当てて～

浅間 正 通

0. はじめに

急速な近代諸科学の進歩は国際間の距離、時間、空間、技術、情報、国家意識、思想等あらゆる分野に急変をきたし、政治、経済、外交、教育、風俗、慣習、制度等にも影響を及ぼしている。「異質な物の受容」という点で大いに欠ける日本社会にあっても昨今の如き著しい諸外国からの人々の流入による接触は免れ得ず、「人の国際化」は日本社会に対しての早急な課題である。学校教育もまた例外ではなく、社会の要請を柱として次代を継承する若者達に国際的日本人として世界の趨勢に順応でき、世界に通用する正しい教育を施して行くといった重要な使命を帯びている。

(新) 中・高等学校学習指導要領・外国語・目標 (アンダーライン、筆者) に新たに付け加えられた「言語や文化に対する関心を深める、国際理解の基礎を培う」および「言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める」等の表現は正に今後の我が国の英語教育に課せられた方向性を端的に明文化しているものであると言っても過言ではなからう。

本稿では、この「国際理解」の為の因子を日本語および英語の慣用表現の比較に求めて、それぞれの言語に内在する発想を明らかにし、異文化間コミュニケーション・ギャップ回避の為の道を探ろうとするものである。

1. コミュニケーション・ギャップ

我々日本人が英語国民と相互伝達しようとする場合には可能な限り現実の

コミュニケーション過程を辿ろうとするのが一般的であって、いわゆる機能シラバス (functional syllabus) が尊ばれる由縁でもある。しかし、現実の問題としてそれでも尚、様々な場面でコミュニケーション・ギャップが発生し得るのは一体如何なる理由からであろうか。その背景にはおそらくコミュニケーションというものが、決して言語の表面的意味内容のみによって支配されるものではなく、伝達内容の「送り手」(addresser)と「受け手」(addressee)との間で為される言語メッセージ (verbal message) と共に感情などの心的作用を含む非言語メッセージ (nonverbal message) をも伝達し得るといった個体間 (intrapersonal) および個人間 (interpersonal) の相互作用に大きく依存しているからではないだろうか¹⁾。すなわち、「言外の意味、ときには音調、接続、強調などによる意味の差、文脈からの意味、生活、文化的背景からの意味、文脈から推論される意味などを知らないと単なる表面的なコミュニケーション」(藤井 (1989 : 56)) に終始し、根本的な部分での相互理解が為されず、結果として異文化間誤解に発展する危険性すら秘めているのである。

次に示す (A), (B) 二つの dialogue は、「知識」として英語を学んだ日本人が遭遇するコミュニケーション・ギャップのごく一般的な situation である。

(A)

Stuart sees Masato, a Japanese student, in the library during the final-exam period.

Stuart : Hi, Masato, how are you doing?

Masato : I'm doing fine. I've finished my exams today.

Stuart : Great. I have five more to go. Let's get together when this is all over.

Masato : It sounds great. When?

Stuart : In a week or so?

Masato : What day?

Stuart : I don't know. Next week sometime. I'll call you.

Masato : What day?

Stuart : Don't worry. I'll call. I have to go study now. Bye.

(*Common Misunderstandings in Japanese-American Communication*, 1987: 1)

(B)

Scott and Tsuneo, a Japanese student, are walking down the street when Tsuneo sees a Garage Sale sign on the telephone pole.

Tsuneo : Garage Sale?

Scott : Yeah, do you want to go to it?

Tsuneo : Not really. I don't have a car.

Scott : We could walk to it. Besides, I could pick up a few odds and ends.

Tsuneo : Oh? They're not selling a garage? . . .

(*Common Misunderstandings in Japanese-American Communication*, 1987: 45)

(A), (B)二つの dialogue 共に、一見すると自然なコミュニケーションが為されているように思われるが、そこには明らかにコミュニケーション・ギャップを垣間みることができる。先ず、(A)に関してであるが、Stuart(以下S)があくまでも儀礼的挨拶として投げかけている一連の発話を Masato (以下M) がそのままの意味 (literal meaning) に固執して解しているが為に双方の対話がちぐはぐとなっている点を伺い知ることができる。すなわち、MにとってSの発話は確かに politeness の範ちゅうに入るわけであるがSにとっては、最低限の友好関係を維持しようとするが為の phatic communion²⁾にしか過ぎないのである。この様に相手に対して心理的負担をかけないようにしようとする発話はある種の politeness と見なすことが出来るが、その実は negative politeness としての機能を内包しているものと言える。いわゆる、「言外の意味」を認知して言語の「内包性」に注意を払う必要性を指摘してくれる良き例と言えよう。では、(B)の dialogue は如何なるものであろうか。ここでもまた(A)の対話文と同様に表面的にはスムーズに対話が進行しているように見えるのだが、実際は一つの語彙、'Garage Sale' の意味に対する双方の指示範囲のずれからコミュニケーション・ギャップに陥っているのが読み取れるのである。

例示した二つの dialogue は、我々日本人が陥り易いコミュニケーション・ギャップの代表格と言っても差し支えあるまい。しかしながら、これらのパターンはいずれも日々の英語学習環境の中で、教授者が神経を配り、知識としての異文化情報インプットを心がけさえすれば容易に異文化誤解への発展を阻止することが可能な category に属するものと言える。その理由として、(A)に見る誤解パターンは我々日本人が日本語という母国語によって為す日常会話においても種々見受けられるケースであるし、また(B)の誤解パターンも、「一つの語彙の指示範囲および意味領域が日・英語間で異なる」といった、いわゆる異文化が産み出すところの最も身近かな学習項目であって、伊藤(1992:14)の言うように一貫して指導計画の中に位置づけておけば十分対応可能な指導領域でもあるからである。例えば、日本語と一对一の対応関係が無いものとして tall, high, look, see などを指導するときに日・英語の対応関係が必ずしも一致しない語彙などを色のイメージ他と併せて学習者に一括提示して行けば一語一訳(one-to-one equivalents)の弊害を認知させることは十分可能となるわけである。

とするならば、同じコミュニケーション・ギャップを引き起こす諸要因の中でも一対如何なる因子が最も危険な因子として認められるのであろうか。その最たるものとしては、「御歳暮」のようなある文化には存在して、ある文化には存在しないという慣習上の違いから生ずる「語彙」、また'smart'といった語のように、ある文化では非常に好意的に用いられているが、ある文化では批判的に用いられているという対立する「概念」が挙げられるのではないかと考える。何故ならば、この様な「語彙」と「概念」は各々の文化の背景に根ざす独自の発想に由来するところ大であるからである。指導が最も困難な題材であると評される由縁である。

したがって、日・英語の基底に存在する基本的文化概念の差異を踏まえた英語学習こそが円滑なるコミュニケーション活動(communication activities)の推進に不可欠となり、異文化理解(相互文化理解)への最も重要な道標となり得るわけである。

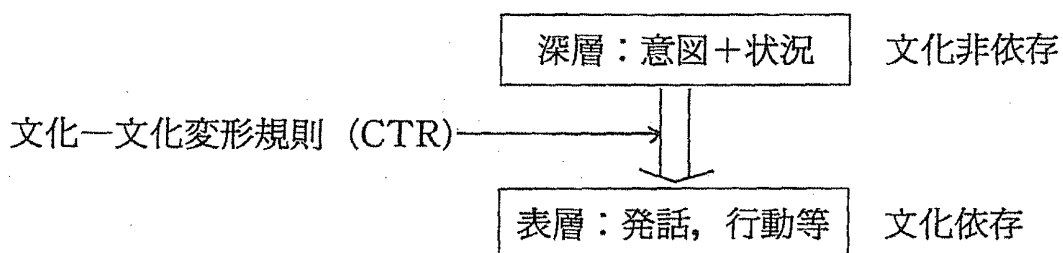
2. 英語の論理形式、日本語の論理形式

日本人の英語におけるコミュニケーション能力の不足は良く指摘される所であるが、その背景には現在の学校における英語教育が(新)学習指導

要領によって随分と改善されて来たとは言え、受験を念頭に置かざるを得ない実状から依然としてカリキュラムの取り扱いは文法中心であって、コミュニケーションを第一目的としたものではない点が挙げられる。しかし、決してそれだけが主たる要因でもなく、その他に日本人と英語国民との間の communication style や論理形式の違いが大きな要素を占めているのも否めない。すなわち、異なった文化の基底には異なる論理の展開法が存在するわけで、それ故にコミュニケーションの過程で障害が発生するのは当然のことと言えるわけである。

本章では英語（とりわけアメリカ英語）と日本語の論理形式の違いを少々考察してみることにする。先ず、Kaplan(1966：1-20)以来多くの研究者によって指摘されている英語と日本語の論理形式の違いが挙げられる。Kaplanによれば、アメリカ人は論を進めて行く段階で直接的パターンを用いるが、日本人は様々なパターンを用いるとしている。そして、前者は直線的 (linear)、後者は回帰的 (spiral) な communication style を用いると定義し、出身文化によって論理の展開の仕方が異なる点を指摘している。(論理的 (logic) 思考を好む英語国民と『理屈抜きで話そう。』という思考を持つ日本語文化が時に相容れないのも肯ける気がする。) また、Oi (1984) は、アメリカ人は論理を展開して行く上で誇張的な表現を多用するのに対して、日本人は 'I think...' などの間接的な表現を用いる傾向があるとも述べている。おそらく、こういった思考様式の差異は深層レベル (感情等) では同じであっても表層レベル (発話、行動等) では全く異なる結果を導き出すところの当該言語の背景にある固有の文化特性に大きく起因しているであろう。

図1



松本(1994：5)が、この文化特性を文化変形規則(CTR=Cultural Transformational Rule)と称してその機能を上のように図示し、異文化特有の

CTR を見つけ出し、自文化のそれと比較することの意義を主張している点で実に興味深い。すなわち、日本人の対人関係の根底にある他者との摩擦・衝突を避けようとする精神も個を重んじ自律を尊ぶアメリカ人の精神も「村」社会からの名残り、そして「開拓者」精神の名残りというある種の CTR の適用を受けているものであることは見逃せない事実である。換言すれば、全ての事象を個人主義 (individualism) で捉えて行動するアメリカ人と集団主義 (collectivism) で捉えて行動する日本人の間には異なる文化特性が介在しているものと言えよう。‘self-realization’ (自己実現), ‘self-reliance’ (自立精神), ‘self-establishment’ (自己の達成) という語を声高に標榜するアメリカ人にとっては「和をもって尊し」とする日本人の ‘collectivism’ も negative 志向の理解しづらい国民性にしか写らないし、また逆にアメリカ人の ‘individualism’ が「利己主義者」という日本語の持つ否定的概念を修正しづらいのも多分に両者の間の深層構造に施された文化という変形規則に注意が払われていないからではないだろうか³⁾。それが故にこそ、「言外の意味を知る」を旨とした英語教育は決しておろそかに出来ないのである。

3. 発想の違いにみる異文化

竹蓋 (1982 : 165-172) は、日本人と英語国民の発想の違いをマクロ的視点から次のように整理している。

- (1) (日) : 情緒的 (感情的, あいまい)
(英) : 論理的 (分析的, 明快)
- (2) (日) : 控え目 (間接的, 謙遜, お世辞)
(英) : 率直 (直接的—感情の表出—, 誇張)
- (3) (日) : 固苦しい (哲学的, 文学的), ユーモアに欠ける
(英) : 軽い発想, ユーモアに富む
- (4) (日) : 没個性的 (創造性に欠ける)
(英) : 個性的 (創造性に富む)

筆者は、上記分類の中でも異文化間コミュニケーション・ギャップ発生の中枢要因となるのは (2) および (4) の項目ではなかろうかと規定して、いくつかの考察を試みることにした。

3.1. 誇張と控え目

英語国民が多用する誇張 (overstatement) とは、我々日本人にとってはしばしば大げさな感情表現と誤解されがちであるが、単に本当のことを大げさに表現するといったより率直な感じの誇張である。誇張表現には次のようなものが挙げられる。

- ① My feet are killing me. (もうこれ以上歩いたら死んでしまう。)
- ② I am dying for a cup of tea. (お茶が飲みたい。)
- ③ I am starved. (腹がペコペコだ。)
- ④ It costs me a world of trouble. (まことに面倒なことだ。)
- ⑤ I haven't seen you for ages. (久しぶり。)
It is ages since I saw you last. (//)
- ⑥ I am bored to death. (退屈この上もない。)
- ⑦ I'd die if I don't pass this test. (今度のテストは絶対にパスしなければ。)
- ⑧ You would have died of laughing. (おかしいの何のって。)
- ⑨ I am scared stiff. (びっくりした。)

これらの誇張表現に対して一方日本語では、

- ⑩ お気に召さないかもしれませんが、お召しあがり下さい。
(≠ I'm afraid you don't like it, but please help yourself.)
- ⑪ 何もありませんが、お召しがり下さい。
(≠ There is nothing to eat, but please help yourself.)
- ⑫ つまらないものですが、お受け取り下さい。
(≠ It's really nothing, but please accept it.)

などのきわめて控え目な表現 (understatement) を多用することによって社会的言語機能を果しているのである。しかしながら、⑩、⑪、⑫で直訳として示されたところの巷に流布する訳文に見られるような英語表現は明らかに語用論的誤用であって、コミュニケーション上の支障を生成するものと思われる。その背景には多分に人の移動の少ない、狭い人間関係の中で人々が生活し、自分の相手となる人の気持ちを遠慮して細かい神経を費やすといった日本社会の特徴が見え隠れしているからではないだろうか⁴⁾。ここに日本語の持つ国際的発信機能の弱さが存在する由縁である。しかし、かと言ってこの発信機能の弱さを否定して一様に英語的発信様式に追随し行くのは果して

妥当なのであろうか。と言うのも前章でも触れたように各々の言語の背景には各々の誇るべき伝統文化が根ざしているわけで、「控え目な表現」を用いて言外に含まれたことをより効果的に表現しようとする方法は日本文化の大いなる美德でもあるのだから⁵⁾。

⑬ 今日時間を裂いて来ていただいて、ありがとう。

(≒ Thank you for sparing the time to come today.)

確かに上文のように日本語に対応する英語表現を見いだすのは可能であるが、それでも日本語が内包 (connotation) する「忙しいかどうか」という配慮までは見い出せないのである。同様に、⑫に見られるような、present を手渡すときに日本人が用いる「つまらないものですが. . .」などの難解な日本語表現も単に現実の英語の表現態様であるところの

⑭ “This is a present for you. I hope you’ll like it.”

に置き換えてしまうのでは、本当の気持ちを言葉で表すのが苦手な日本人が、その心の一端を ‘present’ という語に対して付与する心持ちは伝わらないままなのである (浅間 (1992: 24))。謙譲を美德とする日本的思考様式の誇れるべき特性を真に諸外国の人々に理解してもらおう為にも、また、くしゃみをしたとき、さりげなく ‘God bless you.’ と言える英語文化を理解する為にも英語教育における異文化理解とは、安易に諸外国に自国の文化を紹介したり諸外国の文化を自国に紹介したりするのに留まることなく、言語の背景にある「内包」にも視点を注ぎたいものである。そして、この姿勢が自然と身に着いたときはじめて

⑮ “Here is a little something for you.”

“It’s not much of a present.”

なる同様の謙遜表現を有する英語国民にもきっと、コミュニケーションの非言語的要素 (身振り、手振り) の違いをも補ったところの円滑な相互理解が促進されるものと考えられる。

3.2. 個性的と没個性的

竹蓋 (1982: 171) は、日本人の英語の発想の特徴を実験研究の結果を踏まえて、「個性がなく定型的 (ワンパターン)」であると指摘している。このことは内外を問わず、ことあるごとに取り上げられる問題点であって国際言語社会における日本が抱える重大な課題である。その理由としては、もう二十年以上も前に中根 (1972: 15) が指摘したように、日本では海外に出る人々

の大部分が二十歳を過ぎてからであるために、パーソナリティーができ上がってしまい、また全教育過程を日本で済ました年齢であるので日本的思考のパターンが強くしかれてしまって、異なるシステムに出会ったときこちら側が弾力性を欠いて正面衝突しやすいという特徴に起因しているように思われる。「個性表現の不足」が指摘される理由である。

しかしながら、個性的でないという理由のみで日本人の発想法を一蹴し、欧米式発信型に切り換えよと言うのみであっては、単なる異文化迎合への色彩は免れない。正しい理念に基づいた自己主張、善意で発した言動が英語の表現力の不足によって誤解されるようでは余りにも情けないのである。この点を念頭に置き、筆者は「個性的」、「没個性的」という英・日本語の比較対象の観点を、いわゆる、英語の「自律志向」そして日本語の「依存志向」として捉えて考察してみたい。

英語の「自律志向」および日本語の「依存志向」を裏付ける英語表現としては日本の年賀状に見受けられる次の例文が適格かと考える。

⑯ 今年もどうぞよろしく。

(≠ Please be nice to this year, too.)

すなわち、幼き頃より自主独立の精神を植え付けられる欧米社会においては年賀状という身内の集団で交わし合い互いに可愛がってもらおうとする発想は存在しないのである。この様な日本語の背後に潜む精神的特性を土井健朗氏(1971)が「甘えの構造」と称したのは実に興味深いものがある。しかしながら、この様な日本語の「依存志向」を育てて来た最大の理由は日本文化というものが「和をもって尊し」とする、「村」社会に端を発するところの集団性の論理を志向して来たのに他ならない。したがって冒頭の「個性的」および「没個性的」なるテーマを最終的に読み変えるとするならば英語の「個人志向(自律志向)」対日本語の「集団志向(調和志向)」と言い得ることができよう。そして英語を通して異文化を指導する際には是非とも学習者に対して認知させたい対比の一つでもある。

⑰ すみませんが、ちょっと奥へ詰めて戴けませんか。

(Do you think you could move over a little bit?)

⑱ がんばってね。

(Take it easy.)

例えば、上記二つの例文を表層から見ただけでは何ら文化背景が伺い知れない感じがするが、深層を分析してみると明らかに「個」と「集団」の論理が

浮き彫りになってくるのである。

⑰は、我々日本人が列車内でしばしば必要に駆られて投げかける表現であるが、何気なく使う「詰めて」の言語背景には、そこには自分が座るべき余地が当然権利として存在すると考える「連帯関係」を伺い知ることができる。それに対して、英語の‘move over’は単に位置の移動を意味する「個」の論理しか見受けられないのである⁹⁾。また、⑱の表現は「自律」と「調和」という観点から捉えた場合、英語と日本語で「個」および「集団」という発想が一見、逆転しているかの如く見受けられるのだが、英語の‘Take it easy.’にはリラックスした環境の中ではじめて個性が伸ばされると言う含意が、そして日本語の「頑張って」には物事を成し遂げさせるときに必要な勇気を鼓舞する感情が見受けられ、集団の期待を背負う状況では逆に「気楽に行ってください」の方が不自然なのである。

これまで見てきた様にしばしば「没个性的」と受け止められ、より個性ある表現を求められようとする日本語であっても底辺に育まれる発想は、ときに世界に誇れる文化特性でもあることを忘れてはならないと考える。そして、その点を敢えて学習者に指摘してこそ相互文化理解の視点を据えたところの異文化理解教育が可能となるのではなかろうか。

4. 結 語

本稿において取り扱って比較して来た英語表現および日本語表現はごく僅かの限られたものであって、決して英語と日本語の発想の違いを明らかにして異文化理解へ向けての英語教育のあり方を明確にして来たとは言えないが、本稿執筆の動機はあくまで、異文化理解教育というものは相互文化理解のための教育であって、単に英語には無い発想であるという理由からのみで日本的発想を否定してしまおうとする迎合主義的風潮に対して一石を投じることができればとの考えからである。そのような意味合いも含めて「言外の意味」に気を配ることの重要性を指摘する立場で一貫して来たつもりである。言語の「内包」に目を向ければ自分の文化と異なる文化の中で育った人達特有の異質な言葉や振舞いの中に、その文化独自の特性を見い出すことが出来、無意識に浸っている自文化の特性をあらためて見直させてくれ、思考の幅を大きく広げることを可能にしてくれるのである。日本的発想に基づいて、善

意で発した言動が異文化という尺度の中でもみ消されないためにも互いに価値を認め合うことのできる相互文化理解教育が今まさに必要ではないかと考える。

注

- 1) 縫部義憲 (1983) 「英語学力に影響を及ぼす自己像向上の試み
—Authentic Communication の観点から—」『日本教科教育学会誌』
1983、第8巻第3.4号、p.65.
- 2) 「好感的言語使用；社交的言語使用」情報の伝達や相手への働きかけで
はなく、社会的な連帯関係を維持する為に社交的に使用される挨拶
言葉などを指す。
- 3) 澤登春仁 (1990) 『英語的思考』講談社、p.26.
- 4) 荒木博之 (1973) 『日本人の行動様式』講談社
- 5) 鈴木進 (1991) 『社会人の英語』丸善、p.63.
- 6) 荒木博之 (1973) 『日本人の行動様式』講談社、p.76.

参考文献

- 秋澤公二 (1991) 『アメリカ人の英語』丸善
浅間正通 (1992) 「英語教育を通して文化の底流にふれる」『現代英語教育』
9月号、研究社、pp.23-25.
土井健郎 (1971) 『「甘え」の構造』岩波書店
藤井基精 (1989) 「英語国民の生活と文化を知る」『英語教育』9月増刊号、
大修館
伊藤元雄 (1992) 「異文化理解教材をどう扱うか」『現代英語教育』9月号、
研究社
Kaplan, R. B. (1966) "Cultural Thought Patterns in Inter-Cultural Educa-
tion," *Language Learning*. No. 16.
Kurokawa, S. A. (1987) *Common Misunderstandings in Japanese-American
Communication*, Kinseido.
松本青也 (1994) 『日米文化の特質』研究社
文部省 (1989) 『高等学校学習指導要領解説』教育出版

Oi, K. M. (1984) *Cross-cultural Differences in Rhetorical Patterning : A Study of Japanese and English*. Doctorial Dissertation, State University of New York at Stony Brook.

大杉邦三 (1982) 『英語の敬意表現』大修館

大塚高信・小西友七 (編) (1961) 『英語慣用法辞典』三省堂

澤登春仁 (1989) 「丁寧ということについて」『英語教育』4月号、大修館、pp.29-30.

鈴木進 (1991) 『社会人の英語』丸善

竹蓋幸生 (1982) 『日本人英語の科学』研究社、pp.165-172.